
profundity(仮題)

高里いぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

profundity（仮題）

【Nコード】

N9897Y

【作者名】

高里いぬ

【あらすじ】

<http://suteinu.at-ninja.jp/>でも公開中。

1話

とある雪の日、俺は久々の外出をした。街外れにある我が家と商店の立ち並ぶ通りとを結ぶ道にはくるぶしまでが埋まる程度に雪が積もっていた。

柔らかな雪が俺の肩に落ちた。体温で雪が溶ける。俺は空を仰ぐ。相も変わらず雪は降り続けている。

左手にある傘を差すこともせずに歩を進める。もしも通りすぎる人が居たならば怪訝な視線を向けられる事だろう。だが、我が家へと続くこの道を歩く人間なんてものはそう居ない。

孤独。そういう状況下限定の歪んだ自意識過剰に思考を委ねる。

雪が降る。その事は俺に外出をする事への意欲をもたらした。

俺は現実と空想の境を求めて街を目指す。

時折、現実と妄想の見分け方を忘れてしまう。

今朝なんかは気味の悪い青白い顔をした少年に包丁を向けられ、延々と追い掛け回されるといふ夢を見た挙句、目覚めた後に頭を抱えながらこのまま夢が覚める事がないようにと願ったくらいだ。

そんな時は外出するに限る。噂話に耳を傾け、酒を煽る。そうすることで自分の知識外の情報を得る事ができる。それこそが現実である証であり、生きる糧となる。

つまりは俺にとつての現実というものはそういうものだ。

整備のされていない道や葉の落ちきった広葉樹に積もる雪、空を覆う灰色の雲。

それらは知識を持たない俺にとって幽玄の光景だけれど現実だ。今の目の前の光景も現実だろうか。

今、俺の目の前には一人の少女が居る。街の外れ、木々の多いこの土地と街とを繋ぐ一本道を塞ぐようにして雪の中、少なくない荷物を足元に置いて立ち尽くす少女を捉えている視覚は正常なのか。

俺にこの少女は形容し得ない。それだけの高貴さを纏い、綺麗と愛らしさが同居する顔立ちを持っている。ファーの付いた帽子を被っているが、そこから出た長い髪は雪のせいか澄んだ白金の系のように見えた。

高く売れそうだ。一瞬だけそんな事を考え、後悔した。そんな事を考える大人は関わるべきではないと思わせる清楚さを少女は体現していた。

この少女の存在は空想か、現実か。

まだ街とは相当の距離がある。こんな外れに良家の娘が一人で居るといふのは余程の事情があるか、幻視であるかだ。

雪は容赦なく体力を奪っていく。幻覚相手に話しかける労力を割く気にはなれない。構うことなく横を通り過ぎよう。

「私、悪い大人達に追われているんです。私を匿ってくれないでしようか」

少女は背の丈に不釣り合いな言葉遣いで俺に話し掛けてきた。言葉の端々から感じる高貴さ、纏う衣服の質、やはり世間で言う所の良い所の娘なのだろう。

幻視の次は幻聴か。必要以上には人と関わらず、酒に溺れていれば当然か。

全てを幻覚であると決め付ける事は容易だが、それでは何に縋って生きれば良いのかわからなくなってしまう。ここは自我の知覚する現実を信じる事にしよう。

「俺も悪い大人でね」

深く考えもせずに小さく呟いた。

雪の魅せる幻想の身を案じてもしようがない。

「そんな事はない筈です。私には分かります」

すれ違い様、羽織っていたコートの裾を掴まれた。実体を持った幻覚など、俺は知り得ない。

「少なくとも健全では無いんだがね」

人との接触を極力拒み、妄想に逃避する日々を送る人間の何が健

全か。

「健全じゃないとしても、私は貴方を頼ると決めたんです」

悪い人に追われている。匿え。

久々の厄介事、もとい刺激だ。

「お前を匿って俺にどんな利益がある」

身の回りに何か一つ現実を認識させる物を置くのも悪くないかもしれない。

「私がお話し相手になってあげます」

「そうか。俺は帰る。凍え死ぬ前に元の家に戻ると良い」

人付き合いは億劫だ。子供の相手なんてのはその最たる物だ。大人が経験で理解してきた物の多くを知らない子供が多いのだ。

「帰る家なんていうのは無いです。貴方が私を置いていくというのであれば、私はここで命を終えることになります。未踏の雪の海に浮かぶ少女。悲壮ですけど芸術だと思いませんか」

彼女の言葉を聞いた俺は、誰かを馬鹿にする時のような笑みを浮かべながらこう答えた。

「住み込みの仕事をくれてやる。働く気があるなら付いて来い」

これからは彼女が俺の現実だ。

2話

少女と一緒に我が家へ着いた時には完全に日も暮れていた。

「温かい物を頂けないでしょうか」

冷えたのか少女はソファの上で毛布に包まりながらそんなことを言う。

「そんなものはまだ出せないな。何事も働いてからだ」

まだ荷物すらも片付けていないというのにくつろぐ訳にはいかない。

幸い、我が家は狭くない。部屋数もそれなりにあるし、庭も自分が食べるための野菜を収穫できる程度には広い。少女のための部屋を用意できないこともない。

「そうですか。それにしても良い感じにレトロな家ですね」

少女は軽く散らかった部屋、薄黒くなった天井や触れれば手に埃が付着しそうな壁を見回しながら言う。この一人で住むには大き過ぎる家は元々、祖父が文化に携わる人間を支援する為に建てたものらしい。

「古い建物だからな。俺を頼ったことを後悔してるか」

年の若い子供というのは古ぼけた物を嫌うものだ。

「いいえ。むしろ張り切ってます」

「張り切る、か。まあ良い、部屋を選ぶぞ。付いて来い」

「は、はい」

少女は自分の荷物の重さに難儀しているが、決して手伝わない。甘やかす気は毛頭ないのだ。

雪で反射した月明かりのお陰で室内は明るい。蝋燭も油も持たずに空き部屋の並ぶ一角を目指した。

「ここが俺の寝室だ。隣室の仕事部屋へは中からも移動できるようになっている」

空き部屋までの道すがら、家の中を案内する。

「仕事は何をしているんですか？」

少女は当然の疑問を投げかけた。

「俺が仕事部屋に居る間、騒がしくしなければ何の問題もない」

「あの、仕事は何を」

「物を書いている。お前の仕事の事だったら俺の身の回りの世話ぐらいに思っていてくれて良い」

舞台の脚本や小説、依頼は色々だ。

「作家さん、ですか」

「とにかく今は部屋だ」

俺はそう言つて話を切り上げ、寝室の前を通り過ぎた。

「この部屋は？」

歩き出してすぐ、少女は俺の寝室の隣にある一室の扉の前で足を止めた。

「そこは、たしか」

少女が足を止めた部屋は俺の前の代のこの家の主であつた絵描きが仕事場に使っていた部屋だと記憶している。その絵描きが使っていた画材がそのまま残つてる筈だ。

「部屋が近ければ身の回りの世話も少しは楽ですし、この部屋が良いです」

少女は部屋の扉を開いた。塗料の独特な臭いが鼻腔を襲う。白金のような髪のかかった肩が僅かに震えた。

「良いのか？」

もし俺が居候先でこんな部屋を宛がわれたなら主人に文句を言わずにはられない。

「か、構いません。掃除とかは勝手にしても良いですよね」

「ああ。片付けるついでに古い所とか気に入らない所、画材も好きにしてくれて構わない」

甘やかす気は無いが、わざわざ苦勞をさせるような気も無い。

「よし、頑張ろ」

少女は袖を捲くり部屋の中の掃除に取り掛かった。既に夜だが騒音に気を遣わなければならないような立地ではない。好きにさせよう。

「暖かい物でも作るか」

俺自身、空きっ腹で寝るのはごめんだ。

次の日の朝、俺が起きると少女は姿を消していた。

昨日に片付け損ねた箸の食器も元の位置に戻っている。少女が包まった毛布もきちんと折り畳まれている。何かを盗まれた様子もない。

昨日の全ては夢だったか。現実を知覚する為に外出した箸だったけれど、それすらも空想だったか。

少しだけ気を落としながら朝の習慣をこなしていく。

家の外に出ると、溶けた雪で地面はぬかるんでいた。冷気で眠気を覚ます為に暫く玄関の前で佇む。次第に頭は冴えていった。昨日の記憶の中の感覚は決して空想のものではなく現実のものであった。

では、あの白髪の少女の姿はどこに消えたのか。声を出して探すにしても名を知らない。

背後で玄関の扉が年季の入った音をあげるのが聞こえた。振り向く事をせずに声を掛けられるのを待ったが中々声は掛けられない。

「お、おはようございます。昨晚の内に部屋の整理をしておきました。貴方の使い易いような配置になっていたでしょうから、昨日私がここに来た時から変化した物だけです」

振り向くと少女が居た、それにしても随分と器用な事をするものだ。

「そうか。飯にしよう」

昨日の事を空想だったと勘違いしていたことを悟られる訳にもいかない。俺は素知らぬ顔で家の中に逃げ帰った。

俺が朝食の用意をしている間、少女はじっと俺の様子を見詰めていた。

「手際、良いですね」

「慣れた」

実際、一人で生活していればこの程度の事は自然とできるようになるだろう。

「そうですか」

気心の知れていない相手との沈黙には気まずいものがある。

会話を弾ませるにはまず相手を知ることからだ。

「名前、なんていうんだ」

俺から歩み寄る事に若干の抵抗を感じながらも質問をした。

「ユイです」

姓を伏せたのは誰かに追われているということと明らかに高貴な身元の事に関係してだろう。

「そうか」

わざわざ姓を聞く必要もない。呼称としての記号が機能すれば問題無いのだ。

「名前、なんていうんですか？」

「教えて欲しいのか？」

「冗談っぽく問い返してみる。」

「い、いえ、そういう訳では。ですがやはり不便ですし」

「雑用が仕事なんだ。ご主人様とでも呼ぶか？」

「貴方は馬鹿ですか……」

軽蔑の念の籠った視線を受けた。

「シン」

自分の名前を呟きながら台所の火を落とした。出来上がった朝食をテーブルまで運べば朝食の用意は完了だ。

「目玉焼きって元々はこんなだったんですね……」

殻を割られたばかりの卵を見たユイは何かを小さく呟いたが、俺

の耳で聞き取る事はできなかった。

「シンは料理をするのが好きですか？」

パンと目玉焼きの載せられた皿を運ぶべく、ユイは二枚の皿を持った。

「嫌いではないな」

「なら楽しみを奪っては悪いので、料理は任せます」

ユイは自らの仕事から料理を省いた。

「できないのか？」

「……」

恥だと思っているのか頬を桜色に染めている。

「料理を教えてくださいませんか？」

「良いぞ。だがまずは飯だ。早く食わないと寒さで動けなくなるぞ」
こうして約束をしてしまった。誰かと約束をするなんてことはいつ以来だろうか。

3 話目

「起きて、起きてください」

薪がくべられた暖炉の前、リビングのソファで横たわっていると、ユイに起こされた。

寝惚けた頭で窓から差し込む陽の色を見る。

焼けるような橙色。それは夕焼けのそれだ。

時は既に夕刻。実に不味い。

今日一日だけは退廃的に過ごしてはならなかったというのに。

「ユイ、お前は神に祈りを捧ぐか？」

「ええ」

俺自身、特定の宗教を信奉している訳ではない。信奉する物を強いて挙げるならば泥臭い人間の思想だろうか。自己中心的な物の考え方も時には悪くない。

そしてこんな時だけ神頼みをする。明日が締め切りの仕事が期限に間に合いますようにと。

「これから仕事部屋に籠る。自分の事は自分でできるな？」

夕飯を作る余裕もない。ユイには悪いが自分で用意してもらうか我慢してもらおう事になる。

「できますよそれぐらい。台所は勝手に使わせてもらいますよ？」

「ああ、すまない」

俺は誰かによって掛けられた毛布を無造作にソファの上へ置き、仕事部屋へと急いだ。

寒さなど気にすることなく仕事部屋の机に向き合った。

依頼は新聞の片隅に載せる為だけの短編小説を明日までに書き上げ、街の新聞社まで届けること。

締め切りを守ることが取り柄だというのに。

机の上に整理された書きかけの小説が綴られた数枚の紙と設定の手書きされた紙に一度だけ目を通す。

現状を把握。それと同時に過去の仕事熱心な自分に感謝した。

徹夜すれば明日までに終わらない量じゃない。

冷えた部屋の中で思考を泳がせる。

これから書くべきことを直感と感覚で頭の中に並べた後に、それらを型にはめて構築していく。

「よし」

俺は指の関節を小気味よく鳴らした。

書き始めてから数時間が経った。日はとうの昔に暮れた。

腹が空腹を訴えているが、それすらも心地良いと思える程度に手と頭だけが動いている。

ユイは今頃どうしているだろうか。普通の子供であれば既に寝ている時間の筈だ。ちゃんと寝ているだろうか。

俺が誰かの事を気遣う。そんな事はここがしばらく無かったから、酷く新鮮に感じた。

一度欠けた集中力は容赦無く放散する。

筆が止まってしまった。

そして筆が止まるのを待ち構えていたかのようなタイミングで部屋の扉がノックされた。

「あの、お腹空いてませんか？」

扉の向こう側から声が聞こえる。邪魔をしまっているのかもしれないと不安の籠った声だ。

「助かる」

茹でた卵とポテトを潰し合わせた物の風味を胡椒で整え、それをパンで挟んだ物と飲み物が部屋に運び込まれた。

寝巻き姿のユイが新鮮だと思った。

何かを新鮮だと感じる事の連続。それは惰性に囚われていた人間にとつての日常の時間を引き延ばす。時間の流れる速さは一定では

ない。それが引き伸ばされる事は寿命が延びるような物だ。

「この匂いは……」

心地良い香りが部屋に満ちる。匂いの元は湯気をあげるカップの中の飲み物だと察する。

「良い匂いですよね」

二つのカップの中にはハーブティーが注がれていた。ハーブなんでものは我が家に無かった筈だが。

「なんていう種類だ？」

この手の婦人方が好みそうな趣味は持ち合わせていない。

「マイルドティーなんですけど、ローズマリーとタイム、ペパーミントをそれぞれの半分だけ混ぜた物です。気分転換したい時だったし、集中力が途切れそうな時に良いらしいです」

「そうか」

ユイからカップを受け取り、口に含む。ほど良く刺激的な香りが鼻を通った。確かに良い気分転換になる。

「ここに居ても良いですか？」

自分用のカップで手を温めながらユイは尋ねる。その様子は小動物を思わせた。

「一人だと心細いのか？」

口角を上げながら問い返す。

良家の娘と思われるユイにとってこの薄暗い家の一室に一人というのは辛いものがあるのだろうか。

「寝付けないだけです。寂しくなんかは」

冗談か本気かユイは少しだけ機嫌の悪そうな顔で否定した。

「添い寝でもしてやろうか」

「出るところへ出ましょうか」

ほんの冗談だというのに、ユイは両手首を縄で縛るジェスチャーをした。

「冗談だ」

言いながらパンを口にする。美味い。

「それはそうと、なにか手伝える事はありませんか？ 夕方の様子だと急いでいたみたいですけど」

「もう少し加筆すればあとは見直しだけだな」

新聞社の人間に校正させるのも良いが、最低限自分で見直した原稿を載せたい。俺の小さなこだわりだ。

「お手伝いぐらいならできます。それでも読書好きなんですから」

見直しをユイに任せて良い物か。今、書いてる物に限定して言えばこれは娯楽小説ではない。読み手の意識しない所に俺の意図を含ませて書かれている物だ。一見無駄かとも思える一文が読み手の作品の良し悪しを嗅ぎ分ける優れた嗅覚に作用する事もある。

読者はどうしてそれが面白いのかの理論的な説明はできなくても、面白い面白くないを嗅ぎ分ける嗅覚だけは十二分に優れている。

ここは感想を聞くだけに留まろう。

「読みたいのか？ 手伝いたいのか？」

「正直、お手伝いよりも読んでみたいっていうのが大きいですね」

ユイはあっさりと本音を吐露した。

「なら読んでみるか？」

相手が何者であれ自分の書いた物が人の目に触れるという事は喜ばしい。

俺は机の上に纏められた紙をユイに手渡す。

「じゃあ、読ませて貰いますね」

寝る前に本を読むとほど良い眠気に襲われるという話を聞いたことがある。もしもユイが眠ってしまったら部屋に連れて行ってやるう。

ユイを追う追っ手のことなんかは後々に考えれば良い。一人の少女が我が家に身を寄せているなんてことは誰も思わないに違いない。「どうかしましたか？」

急に尋ねられた。不穏当な事を考えていたのが顔に出ていたのだろうか。

「いや、卵の殻がな」

咄嗟に嘘を吐く。潰された卵の中に殻など混ざっていない。

「す、すいません」

ユイは嘘を信じ、謝る。

申し訳ないことをしたかもしれない。そんな思いすら言葉にしない。

それをきっかけにした気まずい沈黙から、俺とユイはそれぞれの作業に没頭した。

お互いが自らの腹の中にお互いへの思いを孕ませながら、一つの空間を共有する。一見、一枚の絵にでもなりそうな完成された一場面のようにも見えるが、本人達、少なくとも俺は心中穏やかではなかった。

「シンの作るお話、私は好きです」

ユイが俺が過去に書いた物を含めた数作品を切りよく読み終えた直後、そんな事を言った。

既に窓からは日が差し、鳥のさえずりが聞こえてくる。

「変わってるな」

書き終えた原稿を封筒に詰める作業をしながら言葉を返す。

喜びは素直に言い表せない。知らない感情が喜び以上に沸いてしまっただ。

「なんですかそれは……」

ユイは冗談吐きな大人に出会った子供のような目を向けてくる。

「お前の趣味が変わっているかどうかはともかく、今日はこのままこれを渡しに街へ行く。付いてくるか？」

本当に追っ手に追われている身であれば、遠慮したがる筈だ。本当に追っ手に追われているかの確認の意味も持たせて尋ねる。

「……街は人も多いでしょうし、少し眠りたいので遠慮します」

ユイは少し思案をした後に眼を擦りながら答えた。

「なら、行ってくる」

俺は外套を手に取り、部屋を後にする。

街へ向かうまでの道すがら、また変な拾い物をしないように気を付けようと心の中で呟いた。

4 話 目

両の手に荷物を持ちながら雪道を歩く。

目と鼻の先にはもう我が家が見えている。

街では無事に原稿を新聞社の人間に手渡す事に成功し、新聞社から受け取った金で生活の為に消耗品を買い、露店で土産を一つだけ買った。

我が家ではユイが待っている。妙な高揚感を抱いている事に気づき、それを打ち消した。誰かが待つ家への帰宅というものが幾ら良い物だからといっても先程までのにやけた顔で帰る訳にはいかない柄じゃないのだ。

仏頂面で玄関の扉を開ける。

外気と比較すれば幾分か温かい空気が出迎えてくれた。一人暮らしであればこうはいかない。

もうすぐ日も暮れる。冬というのは日の出ている時間が極端に短い季節なのだ。

暗い視界の中、なんとか暖炉のある居間まで辿り付く事ができた。道中、ユイの姿は見当たらなかった。自室で眠り続けているのだろう。

暖炉に燦る火を使って蠟燭に灯りをともした。荷物の多くを居間に置き、片手に蠟燭を、もう一方の手で今晚の夕食の材料を持ち、台所へ向かった。

街で購入したものは塩漬けの肉や堅いパン、砂糖をふんだんに使った菓子などの保存のきくものを中心だ。

買出しに行っただばかりで豊富な食材の中から作る料理を考える。

献立を考えながら台所を見渡すと違和感を感じた。

普段よりも綺麗に片付いているように感じるのはユイが掃除をしたからだろう。だけれど今感じている違和感はずっと現物的な所か

ら生じているようだ。

思い付いて食器の数を確認する。

減っていた。何種かの食器と野菜が。

部屋の隅に目をやると食器であった物の残骸を片したものが見付かった。

それを見つけるとほぼ同時に居間の方から足音が聞こえてきた。この家には俺ともう一人しか居ない筈だ。

「すいませんでした！」

ユイは俺の姿を見つけるやいなやすぐさま腰を折って謝罪した。

「別に構わないが」

有形の物はいつか形を失う。きっかけとなった人間を責める気も気概も無い。

「すいません、シンの為にご飯を用意しようと思ったんですが……」

「別に良いと言っている」

本来そんな気遣いは好まないのだけれど、空回りしたのであれば愛着も湧くものだ。

「え？」

呆気無く赦されたことに驚いたのかユイは間の抜けた顔を俺に晒す。

「皿に対して別段思い入れがある訳でもない。あと、土産だ」

言いながら街の露店で見つけた手頃な値段の手首を飾る為の硝子細工をユイに握らせた。

「で、でもですよ？ 私は家事手伝いで本来はシンの身の回りの世話をするべきで、今はシンのお世話になってばかりで。あ、それとお土産ありがとうございます」

ユイは早口に言葉を並べ立てる。相当に混乱しているらしい。

「ん、なら飯を作るから」

俺は夕食の用意を始める。

ユイは許された事に納得がいかなかったのか、眉をしかめながら俺が料理するのを眺め続ける。

今晚の夕食はいつもよりも少しだけ豪勢になりそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9897y/>

profundity(仮題)

2011年12月3日21時48分発行